

制度の視点で捉える「現代経済学の変容」の意味とその可能性

発言者 中村隆之(青山学院大学)

瀧澤報告は、「制度」を「狭義の制度（ゲームの均衡）」「広義の制度（ルール）」に分け、後者には枠組みそのものを問い直す再帰的・反省的な思考が含まれているとし、その全体が変化していくプロセスを「制度的な諸現象」と捉えている（第1節）。そして、さらにその「制度的な諸現象」として変容のプロセスを捉える見方を経済学という学問分野そのものに向けている（第2節）。その見方からすると、現代経済学の変容は、経済学の外部で生み出された分析ツールや発想（ゲーム理論、実験経済学、行動経済学、神経経済学、ランダム化比較実験など）を採り入れることによる自己変容—経済学の基本的枠組みや学問分野としての境界線自体も見直されるような自己変容—と考えることができる。

瀧澤氏の「制度」概念は有益であり、それを現代経済学の変容に適用する試みも示唆的で、興味深いものと私は考える。そこで、経済学史という大きな視野から氏のアプローチを見たとき、何が言えるか、どのような可能性が開かれているかを私なりに提示し、それに対する氏の見解を伺いたい。また、小野塚報告も制度化や遂行性が経済学の未来について持つ意味について触れている(小野塚報告, 11 ページ)ので、小野塚氏からも私の見解に対するコメントをいただければと思う。

「制度的な諸現象」とパフォーマンス的な変容

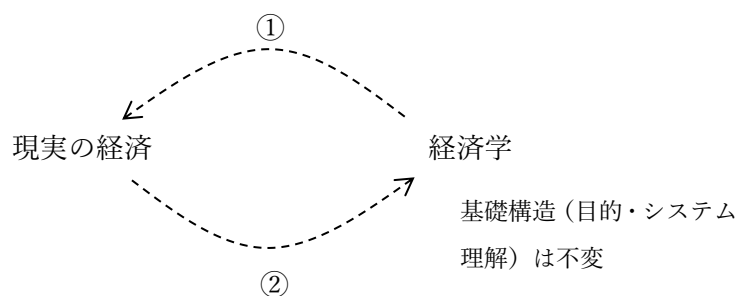
対象を「制度的な諸現象」として把握することの重要なポイントは、そこに再帰的・反省的プロセスが含まれていること、それゆえそのプロセスによってパフォーマンス的な変容が起こることである。現実の経済を「制度的諸現象」として理解するならば、経済学はたんに外で起こることを概念化するものではなく、経済学が与える思考枠組み自体が現実の経済に影響を与えることになる。例えば、経済学がストックオプションの理論を提示したから、現実にはストックオプションが導入される。また、ストックオプションがどのような意味を持っているのかについての人々の理解も、経済学から与えられる。

では、この「経済学→現実」の影響を考慮するということは、どの程度、画期的なことなのだろうか？ もしも経済学が旧来の基礎構造、つまり厚生経済学の基本定理の考え方—所与の資源・技術・選好の下で市場メカニズムというシステムがもたらす需給均衡の作用が効率的な資源配分という目的を達成する—を崩さないならば、画期的とは言えない。既に定まった基礎構造から動いていかないので、パフォーマンス的な変容と言えるようなインパクトはもたらされ得ない。先程のストックオプションの例で言うならば、株価最大化という正しい行動を採らない経営者に正しい行動をとらせるインセンティブを与える制度という教科書的な理解に留まるのであれば、「色眼鏡をかけて現実を見る」ことの一例に過ぎず、そ

2020/10/18

これから何らかの変容を期待することはできない。

「経済学」が動かない：パフォーマンスな変容なし



たとえ経済学概念が現実の経済に何らかのインパクトを与えた (①) としても、現実の経済の現象を既存の経済学の枠組み中で理解するだけ (②) なので、変容は起こらない

しかし、経済学が旧来の基礎構造、つまり資源・技術・選好を所与とした上での資源配分の効率性を目的とし、市場メカニズムというシステムがその資源配分を担うという基礎構造を超え、新しい目的とシステム理解の下でパフォーマンスな変容のプロセスに入るのであれば、画期的である。

例えば、ストックオプションのような形ある利益によって与えられるインセンティブよりも、内発的動機の方が重要であるという経済学上の考え方が現れることによって、経営者が自身の欲求を整理し、意味づけしていく。私は金銭財産を増やすよりも、やりがいのある事業を手がけたいのだと意識化される。そうなれば、当のストックオプション制度そのものが見直されるかもしれない。

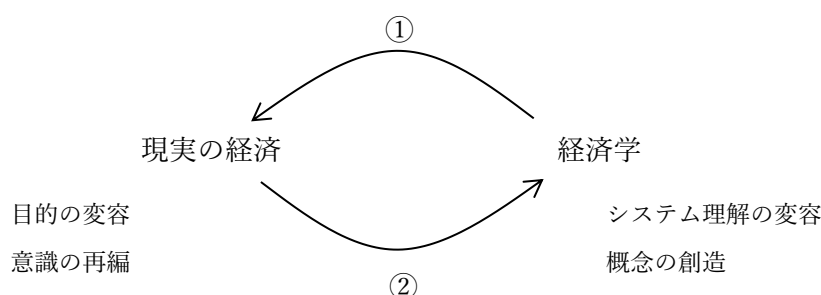
いや、それ以上に重要なのは、経済学が内発的動機を表に出すことによって、従来の経済学が想定していた目的 (= 消費者の欲求を充足すること) 以外の目的 - 内発的動機の充足、やりがいのある仕事をする、など - が明示的に語られるようになる点である。この新しい目的は、従来、旧来の目的である消費者の欲求充足のための手段に過ぎなかった (内発的動機を充足するような会社経営をすることでより GDP が高まる)。しかし、新しい目的それ自体が生きる上での重要な価値であるならば、それは手段ではなく、目的そのものである。そう考えるならば、消費者の欲求充足を市場メカニズムの作用を通じて実現しようという経済学の基礎構造そのものを大きく見直さなければならなくなる。

このような新しい目的 (消費者の欲求充足以外の目的) は、働く者の内発的動機の充足だけではない。地球環境にやさしい製品を生産する会社を応援したい、企業の社会的責任を果たしている会社に投資したい、などさまざまである。それらを従来は「そういう選好を持つ

2020/10/18

ている」で片付けていた。しかし、実際、それで片付けることはできない。新しい目的は制度化されることにより明確に意識され、また意識化されることにより制度化を促進する。そのプロセスを通じて選好それ自体と選好を実現する制度が同時に形成されていく。これを本気で扱うならば、消費者の欲求充足（GDP の増大）を目的に据えることも、金銭的利益を最終的な動機として経済全体を編成することもできなくなる。

制度的な諸現象：パフォーマティブな変容



経済学概念を通じて、現実の経済のなかに新たな目的（規範や選好）に光を当て、現実に変化を与える（①）。一方で、新しい目的を捉えうる新しいシステム理解や新しい概念が作られる（②）。

資本主義的価値観の再考

経済と経済学が、新しい目的とシステム理解の下で、パフォーマティブな変容のプロセスに入ることの意義は計り知れないほど大きい。なぜならそれは、資本主義的価値観そのものへの問い直しを含むからである。「資本が利潤動機で動き、それが適切な競争的市場によって制御されれば、消費者利益＝GDP という目的を実現する」というのが、資本主義的価値観である。資本主義的価値観を嫌悪していたケインズも、今しばらくは物質的生産の拡大がもたらす豊かさが必要であり、我慢して資本主義的価値観を利用すべきだ、と熟慮の上で主張した。真にわれわれを豊かにする価値を大事にできるのは、順調な経済成長を 3 世代ほど続けた後において（我が孫たちの時代において）である、というわけだ¹。ならば、今はまさにそのときを迎えているのかもしれない。

¹ Keynes, J.M. (1930), "Economic Possibilities for Our Grandchildren", in The Collected Writings of John Maynard Keynes, vol.9.

経済学・経済学史の可能性

さて、経済学と現実の経済が相互に影響を与えながら進むという可能性を示した。しかし、もちろんそれは可能性に過ぎない。経済学は、実際、新しい目的とシステム理解を適切に概念化し、現実を動かしていけるだけの力を持っているのだろうか？ それは、経済学が示唆的な概念を創造できるかにかかっている。経済学は、現実を説明・予測できるような因果法則や模造としてのモデルを作り出す学問であるより前に、現実を理解するための地図を提供する学問である²。スミスが切り拓いた地図は、長らく経済学を支配してきた。その地図の下で我々は経済を「市場を通じて人々が選好を伝え合っているところ」とみなし、さらに「その市場の機能を通じて経済的基準からみて豊かな社会（簡単に言えば大きい GDP）が実現する」と考えてきた。新しい経済学はこれを超える地図を持たなければならない。

「経済学史」という学問分野は、そういう局面に我々がいるということを理解する助けになる。「経済学史」は経済学の歴史全体を幅広い視野から見るので、現代経済学の変容を歴史的展開のなかに位置付け、その意味を理解するという作業ができるのである。

瀧澤氏・小野塚氏への質問

上で述べたように、経済学は、新しい目的と新しいシステム理解を提示し、それを通じて新しい現実の経済を導いていくものになる可能性を持っている。そうなるためには、経済学が新しい目的についての基礎的な概念を提起していくことが必要なのではないかと私は考える。具体的には「道徳性」「公平」「自由」といった概念を経済学の中で表現するということである。

もちろん、今ある人間の動機・選好・行動パターンを、色眼鏡でなく、現実のありのままの姿で理解することは重要である。しかし、今ある現実を写し取るだけでなく、「道徳性」「公平」「自由」などについて経済学が主題化することそれ自体が、人々の動機・選好・行動パターンに影響するだろう。そして、それが新しい諸制度を形作ることに繋がる。それは双方向に変化を促す過程であり、決して英知を持った経済学者が上から人を「正しさ」の鋳型にはめ込む過程ではない。

経済学がパフォーマンスな変容のプロセスのなかにあるので、「道徳性」「公平」「自由」といった基礎的な概念を経済学の中で表現していくことが、有意義な変容が生まれるために大事になるのではないかと、それは人を鋳型にはめ込むシステム・デザインとは別物ではないか、という私の見解について、どのようにお考えでしょうか？

² Harrod, R.F. (1938), "Scope and Method of Economics", *Economic Journal* 49, September.